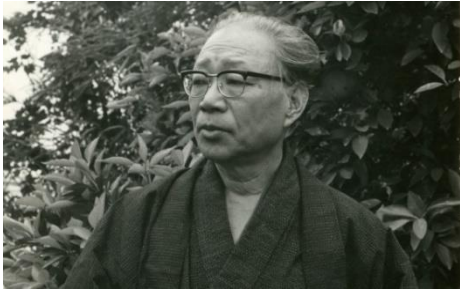


「いのちと文学—日本近代文学とキリスト教を巡って—」



山本周五郎文芸 とキリスト教



『赤ひげ診療譚』『五辨の椿』—人間凝視と祈りの文芸

2024 年 11 月 16 日(土) 午後 2 時～4 時

細川 正義 先生

(関西学院大学名誉教授、日本キリスト教文学会副会長)

【講演要旨】

山本周五郎は小学時代、父親によって横浜にあった日本メソジスト教会横浜上原教会の日曜学校に通わせられます。そのキリスト教との出会いは彼の生涯に影響を与え、最晩年の『おごそかな渇き』を書いた時には、人間の生活における「宗教と信仰がどういう位置を占めているかを探究してゆきたい」とし、「現代の聖書」を書くつもりで書くのだ、と述べています。

今回取り上げる『赤ひげ診療譚』『五辨の椿』を書いたころも、きん夫人と二人で聖書を読み直していたと、きん夫人の『夫 山本周五郎』に回想されています。『赤ひげ診療譚』では、主人公 新出去定に「人間ほど尊く美しく、清らかでたのもしなものはない」、「だがまた人間ほど卑しく汚らわしく、愚鈍で貪欲でいやらしいものもない」と言わしめ、人間の真(まこと)を人間愛のまなざしで描いています。『五辨の椿』は、「御定法で罰することのできない罪」に立ち向かうおしのを通して、人間の罪と贖いの問題に取り組んでいます。

『おごそかな渇き』の中で、登場人物の一人が「私は人間を信じます」というところがあります。周五郎文芸の初期、昭和 13(1938)年の日記に「人間を書くのだ、真実の人間が書ければ『面白さ』は附いて来る」と記す創作に対する思いは、最後の作品の中のこの一言へと通底して、周五郎文芸の一貫した視点を示しています。『おごそかな渇き』の主人公 松山隆二が「もしあなたにとって私が必要なら、私を生かし、私のやりたい事にちからをかけて下さい」と祈るところがあります。この祈りこそ、周五郎が自らの文芸の世界に人間の真を問い、人間のいのちにまなざしを注ぎ続けた創作世界のすべてを示しているということが出来ます。

『赤ひげ診療譚』『五辨の椿』が私たち読者に与えてくれる〈文学の力〉を味わいたいと思います。

【講演プロフィール】

1977 年関西学院大学院文学研究科博士課程を終え、九州女学院短期大学教授を経て関西学院大学文学部教授。2017 年 3 月定年退職。名誉教授。博士(文学)。現在、日本キリスト教文学会副会長・関西支部長、島崎藤村学会会長。著書『島崎藤村文芸研究』(2013 年 8 月、双文社出版)、『文芸の葉—近代小説点描』(2018 年 3 月、鼎書房)、『山本周五郎長編小説全集』(2013 年～2014 年、新潮社)第八巻、第九巻、第十三巻、第二十三巻「解説」他。



【「いのちと文学」今後の予定】

●Part2 25 年 10 月 18 日(土)14 時
松本常彦先生(九州大学名誉教授)

「沈黙と文学—芥川龍之介・遠藤周作の場合」

●Part3 26 年 10 月 17 日(土)14 時
奥野政元先生(活水女子大学名誉教授)

「受難の恵み—漱石文芸の世界」

※日程は変更することがございます。

参加無料。

どなたでもどうぞ!!

メール又は電話にて、11 月 13 日(水)
までにお申込みください。

日本基督教団 小倉東篠崎教会

北九州市小倉北区東篠崎 1-2-13

Tel&Fax: 093-951-7199 Mail: hp@higashishinozaki-ch.jp

小倉駅からモルルール乗換、片野駅下車、徒歩 2 分。